

# 21世紀ひょうご市民学会 会報

14号  
2010年8月20日

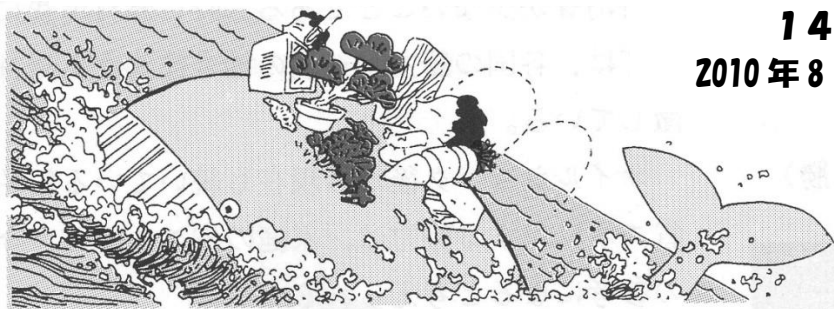
—編集・発行—

21世紀ひょうご市民学会

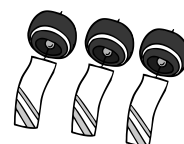
「神戸生活創造センター」登録番号 630

代表世話人 澤木昌典

<http://www.hyogo21ctzn.com>



## 残暑お見舞い申し上げます。



酷暑、猛暑、炎暑、お盆を過ぎてもうだるような暑さです。

皆さまお元気で夏を乗り切られていますでしょうか？今年戦争が終わって65年、語る人が少なくなっていることを感じます。91歳の母が、やっとゆっくり向き合ってくれる私を相手に、昔の暮らしぶりをぼつぼつと愉しげに語るのに耳を傾けながら、「これは大事」とメモっています。

さて第5回総会は議事通り進行し可決されました。当日出席できなかった方は、同封の資料をご覧ください。今総会で、大きく変更のあった点のみをお知らせします。

### ◎グループ研究の公募

学会の前身の「市民による自主的・積極的な研究を奨励し支援する」というユニークな趣旨を大事にしたいということで、今年度グループ研究の公募をします。コアメンバー2人以上で申し込む。世話人会で認められれば5万円を限度として助成します。予算の都合上1グループのみですがふるって手を挙げてください。会報がお手元に届いた日から1か月以内に研究活動世話人（野口・電話 0743-79-0157）まで申し出てください。追って連絡を入れます。研究成果の発表は来年の総会の場でさせていただきます。

個人研究も発表の場を会報、ホームページに確保しています。随時、原稿（A4サイズ1ページまで）を広報世話人（足立・電話 078-792-6243）までお寄せください。

◎会費の見直しがありました。年会費、個人会員3,000円、団体会員50,000円です。平成22年度会費納入をお願いします。「振替用紙」を同封しています。

9月の  
予定

### 研究会を持ちます。

- ◆と き：9月9日（木）15時～17時
- ◆と ころ：生活創造センター5階・学習支援室
- ◆内 容：これまでのまとめ方、今年度の進め方を話し合う。



知的  
サロン

- ◆10月8日（金）、12月10日（金）  
豊田寛さんを講師（市や県で引っ張りだこです）に神戸の歴史散策を予定しています。興味深い説明を大きな声でされる元気な姿からも学ぶものがあります。神戸を「景観」の視点からも見てみましょう。



研究会の様子(スライドを見ながら)

平成21年度総会において表題のテーマで研究事業を行うことが決定され、実地見学会を含め5回の研究会を開催しました。この一年間のあゆみを振り返ってみます。

第1回研究会では澤木昌典教授から、まちなみ景観を論じる上での視点・論点など講義があり、そのあと、全員で研究の進め方について話し合いました。その結果、現地視察を中心に、市民の視点からどのようにまちなみ景観を評価するか考えていくこととし、最初の見学地に大和郡山市を選びました。

大和郡山市は、筒井氏・豊臣氏(秀長)によって開かれ、江戸時代から明治初めまで、大和地方の行政・商業の中心として栄えた城下町で、町名などにかつての面影が偲ばれました。第4回研究会では尼崎市内の見学。この際、各自が「好きな景観、気になる景観」を写真におさめ、これを澤木先生にまとめていただき、スライドを見ながら各々「気に入った、あるいは、気になったポイントはなにか」を述べ、町なみ評価についてのそれぞれの視点を確認し合いました。これについては別途、「まちなみ景

観の評価、私の視点・論点」として感想文あるいは小論文をもとにまとめたいと思っています。

以上の経過から、学会の研究事業としてまとめるにはフィールドワークを中心にしながらも、対象にする主題をもう少し絞り込んで研究を進める必要があるということになり、さらに1年継続することになりました。

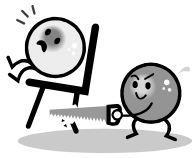
現在参加の会員諸氏の関心がどちらかという歴史的な景観を残すまちなみに向いているので、対象に城下町あるいは宿場町の景観を採り上げてはどうかという提案もあり、候補地や手法などを次回研究会(9月9日)で討議することとしています。

昨年度参加されなかった方でも「歴史に関心がある、いろいろ出かけてみたい」と思われる方はご参加ください。お待ちしております。

(9月の研究会は同封のはがきでご出欠をお知らせ下さい。)



研究会資料



「私たちの会員である大竹真一さんが、NHK テレビにディープピープルとして出演される」  
ということ、小林さんはいちはやくキャッチされ、是非皆に知らせたいと電話連絡をして  
くださいました。その内容を、高校教師であった小林さんにまとめていただきました。

## 予備校人気講師の鼎談からまなぶ

小林 東生

7月24日(土)夜11時30分からの30分番組の模様は、大竹先生を含む各予備校の人気講師3人(英語・国語・数学)が勤務先での状況や将来等をディベートなさるものだった。講師の方々が、担当教科の指導内容、指導方法や指導効果を高めるための創意工夫、know-how等のごく一部を披露された。時間の制約で少ない例に止まったが、それらを基に類推すれば、受講生のために骨身を削って問題一つ一つに適切な教案を作り、落ちこぼしのない授業をされているのが推察できた。

現在の公教育、特に高校教員は誰でも少なからぬ学習指導のknow-howをもっているからこの番組に興味津々、大いに参考になったと思える。かつては進学指導に異を唱える教員がかなり教育現場に存在していた。

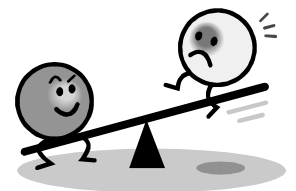
私たちの会員の大竹先生は、数学教育の基礎ともいえる「数学のものの考え方を深く学びとらせるように導く」ことが大切だと説く。いち早く正答を出すために、問題をパターン化したり、解答していくテクニックを教えたりするだけではないと言う。真に数学力を伸ばすには、まず、教師自身が問題を好きになり、興味を示し、解法を探る喜びをもっている姿勢を受講生に示さないと、相手は真剣に取り組もうとしない。心が通じ合える仲にならないと教師の指導力が十分に発揮できないと言う。この発言に対し、臨席していた美人の東大・大学院生(医学生)がすぐに賛意を表明、私も素敵な姿勢だと感動した。また、与えた問題の解答作業中に正誤の質問に来て心も鬼にして答えずに、自らの力で考え

続け正解するように指導すると言う。予備校なのにと不信に思ったが、これこそ王道を歩ませる愛の鞭だと思い直した。また、大学入学後に遭遇する高等数学に対処できる教案や、大学側が望む数学力を考えに入れた指導も行っている、と聞いて驚嘆した。

いろいろ話されたが、総じて大竹先生は指導の重点を、将来に必要な問題把握力、思索能力、応用能力、極限の概念、自己実現力を身につけさせることにもおいておられると拝察した。このような指導を受け学問力を獲得していく受講生たちの感慨はいかばかりか、と思いつつ番組を見終えた。

半世紀ほどの昔、わが国は「教員の地位に関する勧告」を受け入れた。そのⅢの指導原則の6.は『Teaching should be regarded as a profession:』の文言で始まり、教員に対して厳しい責務を要求している。これを予備校の先生方は実践しておられる。高校の先生方も一層頑張っしてほしいと願った。おわりに大竹先生はまさに“deep people”! 人気の所以を見る思いがした。

参考文献・『教員の地位に関する勧告(昭和41年)』より  
『Teaching should be regarded as a profession: it is a form of public service which requires of teachers expert knowledge and specialized skills, acquired and maintained through rigorous and continuing study: it calls also for a sense of personal and corporate responsibility for the education and welfare of the pupils in their charge.』



# 私の中の戦争

8月は一人ひとりが改めて平和を誓うとき。メンバーに戦争時の体験、終戦の記憶を寄せてもらいました。今、アカデミー賞に輝いた寺島しのぶ主演の戦争映画『キャタピラー』を上映しています。その監督が「戦争で得るものは何もないのです」と言っているのが心に残りました。

●3歳の記憶です。夙川に住んでいて、大きな防空壕にみんなと一緒に逃げていました。私は1歳違いの妹を連れ、母はまだ赤ん坊だった弟をだいて逃げました。終戦になって、家が洋館だったのでアメリカの兵舎になり、私たちは親戚のある加東郡に疎開し、小学校3年生までくらししました。（津田）

●そのとき、私は小学校3年生でした。暑い夏のお昼、みんながラジオの前に集まり玉音放送を聴きました。小学校3年生の私には、放送の内容をよく理解できませんでしたが、まわりの大人が戦争は終わったというのを聞いて、「そうなんだ」と思いました。

縁故疎開で母方の祖母宅へ預けられていた私と弟は、3月末空襲が激しくなってきた大阪へ帰ってきました。夜、大阪の町が空襲で赤く焼けるようすを、淀川の土手から眺め、恐ろしかったことを覚えています。

戦後になって、食べ物がなく、ひもじい思いをした記憶が残っています。今年も終戦記念日の夏を迎えましたが、戦争のない平和の幸せをかみしめています。（松原）

●終戦の年、私は3歳半。加古川の下流のほり（当時印南郡。後に高砂市に編入）にある実家に住んでいました。そんな歳ですから当時、日本が太平洋戦争を戦っていたことや、わが国に原爆が投下されたこと、昭和20（1945）年8月にいわゆる昭和天皇の玉音放送があったことなども、全

く記憶にないのです。それなのに、（1）母親と祖母が苦勞して庭の隅に家族の防空壕を掘っていて、中に入れば「ままごと遊び」をしているように思えたこと、（2）あるとき庭の端にあった柿の木に登って遊んでいたら、どういうわけか1機のグラマン機（P51かも。あとで皆からそう言われた）が突然ごう音とともに低空飛行してきて、機銃を発射されたこと、などははっきり覚えています。状況がまだ理解できない年頃ですから、戦争状態だとか、恐怖心等は全くありませんでした。

私の次の記憶は、占領下時代のことに飛んでしまいます。思い返してみれば、3～4歳の幼児で、世の中のことが何ひとつ理解できなくても、とくに異常な事象だけは脳裏に残っているものですね。大都会から遠く離れた田舎の村にいましたのと、まだ幼児だったため、戦争や終戦の実感はあまりなく、その後両親や親族はじめ周りの人から戦時中のことを聞かされたり、兵隊に行かれた方のお墓が並んでいるのを見たりして、周りの人々や村々にも戦争の爪あと・悲惨さが深く及んでいることを知り、時折今も、その思いを新たにす次第です。これからは戦争のない平和な社会が続くことを願っています。（苗村）

●私は龍野の田舎に住んでいましたから、食べ物でひもじい思いをしたという記憶はありません。都会育ちの主人は今でも、「かぼちゃといもだけは食べたくない」と言います。終戦の日、いつもどおりみんなといっしょに川へ泳ぎに行っていた時、年上の人たちがワイワイと大きな声で言い合っていたのが、「終戦」のことだったんだと後になってわかりました。その日は特に暑く、鉄筋の橋を渡る時、はいていたゴム草履から感じた足裏の暑さを今でもよく覚えています。（田中）



## あとがき



総会後の交流会では早めの時間帯にビールがはいる、みな開放感を感じた嬉しいひとときでした。話題も日ごろと少しかわり、塩野さんが子どもたちの環境教育講師としてメンバー登録し全国に行かれている話、趣味の山登りや畑づくりの話など多岐に広がりました。今年度も、紡いできた人と人とのつながりを大事に、たのしく、面白がって学会活動をやりましょう。（あだち）